The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	眼窩偽腫瘍におけるリンパ球サブセットおよびリンパ球機能
Author(s)	萩原, 正博
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37618
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【141】

氏名・（本籍）	萩原正博（はぎはら まさひろ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 9495 号
学位授与の日付	平成3年2月4日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**眼窩偽腫瘍におけるリンパ球サブセットおよびリンパ球機能**
論文審査委員	（主査）教授 真鍋 禮三 （副査）教授 濱岡 利之　教授 谷口 直之

論文内容の要旨

【目　的】

眼窩偽腫瘍は，“臨床的には眼窩腫瘍として認められるが，病理組織学的には炎症性病変であるもの”と定義され，眼窩占拠性病変の約半数を占める。その病因については充分に解明されておらず，異なった病態のものが含まれている可能性もある。しばしば病理学的に lymphoid hyperplasia を示すが，本来明瞭な構造を持ったリンパ装置のない眼窩にこの様な所見を示すのは極めて特異的であり，その意義も明らかでない。

本研究の目的は，臨床病型と病理組織像との関連を明らかにするとともに，免疫組織化学的に検討を行い，さらに末梢血リンパ球機能およびサブセットの構成を調べ，免疫反応の関与を明らかにすることである。

【方　法】

眼窩偽腫瘍患者16名（眼窩筋炎型6名，傍眼球型5名，涙腺炎型5名）及び健康対照者20名を対象とし

1）病理組織学的検討

治療開始前に行った試験切除または外科的に摘出した際に得られた病理組織標本を non-specific inflammation および lymphoid hyperplasia の2つに分類した。

2）免疫組織学的検討

パラフィンまたは凍結切片に対して酵素抗体法を行った。パラフィン切片に対してはＬＣＡ，ＭＢ１，ＰａｎＢ，ＵＣＨＬ１，ＭＴ１，ＯＰＤ４を用い，凍結切片に対してはＣＤ20，ＣＤ３，ＣＤ４，ＣＤ８，κ，λを用いた。

3）末梢血リンパ球サブセット

緩解期における末梢血リンパ球サブセットをレーザー・フローサイトメリーにて検討した。表面マーカーとして，ＣＤ20，ＣＤ３，ＣＤ４，ＣＤ８，ＩＬ２を用い，さらにＣＤ３，ＣＤ４，ＣＤ８についてはＨＬＡ－ＤＲとの two-color 分析を行った。

4）リンパ球幼若化反応

リンパ球幼若化反応として，緩解期における末梢血リンパ球のＰＨＡ，ＣｏｎＡ，ＰＷＭ，ＳＡＣなどの非特異的mitogenに対する反応を検討した。

【成　　績】

1）病理組織学的検討

傍眼球型，涙腺炎型は lymphoid hyperplasia の像を示し，特に涙腺炎型では follicular lymphoid hyperplasia の像を示した。筋炎型では非特異的慢性炎症像を示した。

2）免疫組織学的検討

follicular lymphoid hyperplasia においては，濾胞領域にはＢ細胞，濾胞間領域にはＴ細胞が主として分布していた。diffuse lymphoid hyperplasia においても島状にＢ細胞が集簇し，その周囲にはＴ細胞が分布していた。

3）末梢血リンパ球サブセット

ＣＤ20陽性細胞，ＣＤ３陽性細胞は，いずれの型の眼窩偽腫瘍患者も健常者との間に差はみられなかった。傍眼球型，涙腺炎型では，ＣＤ４陽性細胞の増加，ＣＤ８陽性細胞の減少がみられたが，病理学的に follicular lymphoid hyperplasia が確認された例で，特に著明であった。

4）リンパ球幼若化反応

ＰＨＡ，ＣｏｎＡ，ＰＷＭ，ＳＡＣのいずれの mitogen による幼若化反応には，いずれの型の眼窩偽腫瘍患者も健常者との間に差はみられなかった。

【総　　括】

眼窩偽腫瘍（傍眼球型，涙腺炎型）における lymphoid hyperplasia とは，非特異的炎症に続発して，眼窩内に散在性に存在していたリンパ球が著しい反応性増殖を来したものであり，所属リンパ節における反応性過形成と類似した反応であると考えられた。

このような過剰な増殖は，緩解期おいても末梢血リンパ球サブセットにおける helper Ｔ細胞優位という変化で反映されるなんらかの免疫機能の異常によると考えられた。

眼窩筋炎型は，傍眼球型および涙腺炎型とは異なった病態であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

眼窩偽腫瘍は眼窩占拠性病変の約半数を占めるが，その病因については全く検討されていない。本研究では，眼窩偽腫瘍の病因，病態を解明することを目的として，多数の眼窩偽腫瘍を病理学的に検討し，臨

床病型との関連を明らかにするとともに，特に lymphoid hyperplasia を示すものについて，免疫組織学的に検討し，その意義を明らかにしている。さらに緩解期における末梢血リンパ球サブセットを検討し，眼窩偽腫瘍における免疫異常の関与を明らかにしている。

眼窩偽腫瘍のうち傍眼球型，涙腺炎型は，病理学的に lymphoid hyperplasia の像を示すこと，さらにこれらでは免疫組織学的にリンパ組織と同様の構造をとっていることを明らかにし，眼窩偽腫瘍（傍眼球型，涙腺炎型）における lymphoid hyperplasia とは，非特異的炎症に続発して，眼窩内に散在性に存在していたリンパ球が著しい反応性増殖を来したものであり，所属リンパ節における反応性過形成と類似した反応であると述べている。また，緩解期における末梢血リンパ球サブセットではＣＤ４陽性細胞が相対的に増加していることを明らかにし，眼窩偽腫瘍の病因にはなんらかの免疫機能の異常が関与している可能性を指摘した。

以上の研究は，眼窩偽腫瘍の病因，病態の解明に有用であり，学位授与に値するものである。